

「敬語コミュニケーション」講座の ゲスト・セッション活動

川口義一

言語・生活研究所（早稲田大学名誉教授）

chuankou@gmail.com

1. 日本語教育における敬語の扱い

現在の日本語教育の現場では、国内か海外かを問わず、敬語の多様性を意識化させる指導がなされておらず、その結果、学習者が相手ごとに敬語や文体を変えるコミュニケーションができるようには支援されていない。特に、スピーチスタイル、つまり会話の文体が丁寧体とぞんざい体=非丁寧体の2分類でのみ提示されていて、その間に存在する「中間層」の存在が等閑視されていることに深刻な問題が存在する。ぞんざい体自体も、形態論的な概念である「普通形」と混同された提示が主流で、この文体を特徴づける、副詞・接続詞・縮約形などの他の言語要素¹の紹介が無い。デス・マス終止が基本で、日常生活で頻用される丁寧体内部にも、間違いなく3種類のスピーチスタイルのレベルが存在する²が、それが理解できるような教科書設計もなされていない。しかも、その、それぞれのレベルを特徴づける狭義敬語の分類が3分類とおおざっぱすぎて、まったく敬語指導の役に立たない。

総じて、コミュニケーションのための会話は意図的な相互理解を模索して進められるべきだという理念が見えず、練習も非敬語形の動詞を敬語形に変えるというようなものが多く、極めて機械的である。その結果、初級教科書を全課終え、中級に進んでも、なおかつ敬語の使い方に自信の持てない学習者を作ってしまった。この現状は、CEFRの理念のもとに複言語使用者の学習支援を目指す現代の日本語教育に思潮に沿うものではなく、早急に改善されるべき事態であると考えられる。

2. スピーチスタイルの意識化指導

2.1 指導の概要

本稿の筆者は、前章で議論したスピーチスタイルの指導に関する不都合な事情を解消し、学習者に日本でのコミュニケーションにかかわる会話文体指導を行うことを目的として、日本の大学の留学生向けに以下の2種類の講義を提供し、その中で日本語の多層的なスピーチスタイルを意識化させる教室活動を行った。これらの講義は、2022年度と2023年度の2年間にわたり、いずれも同一大学の秋学期の週1回の講義日に午前・午後に分けて行った。

午前のクラスは、「敬語コミュニケーション」と言い、全15回の授業中9回で学内外から招いたゲストと適切な敬語を使って会話する活動で、いわゆる「ゲスト・セッション」である。しかし、丁寧体内部の敬語使用の意識化に特化した活動であるため、一般的に認識されているゲスト・セッションとは少々異なるように感じられるかもしれない。詳細は、後述する。

午後のクラスは、「日本語ロールプレイ作文」と言い、全15回の授業中9回で、「依頼」・「提案」・「誘い」など、日本語の機能的会話文を、学習者2、3名のグループで創作させ、発表させる活動である。会話文創作の前には、機能的会話文各種の基本的な表現方法を紹介する³。会話文作成の最初の3回は、会話中の2名の登場人物が通常の丁寧体で会話をする設定の機能的会話文を書かせるが、4回目以降は、書き上げた会話文を丁寧体からすこしずつダウンシフトさせ、しかし、ぞんざい体には行きつかないレベルで止まるように文体を調整して書き改めさせるという活動になる。ただし、紙幅の関係で本稿ではこの講義については論じることができない⁴。

2.2 受講生とシラバス

本稿で紹介している2つの講義の受講生は、日本の私立大学の短期日本語講座の留学生である。4年制の学部正規生ではないため、受講生がみな JLPT の N1 合格者というわけではなく、平均的に N3～N2 合格レベルの日本語力である。2022 年度の受講生は、11 名の欧州の同国籍学習者で、全員午前・午後の講義を履修した。一方、2023 年度の受講生は、多国籍学習者で、午前 9 名、午後 8 名がそれぞれの講義を履修した。そのため、同年度に午前・午後ともに履修した受講生は 5 名である。したがって、2022 年度の 11 名と 2023 年度の 5 名は、狭義敬語が多用される丁寧体レベルの会話とそれをダウンシフトさせてぞんざい体の要素が入った会話の、2 種類のスピーチスタイルを学習できたことになる。

「敬語コミュニケーション」講座のシラバスでは、前述したとおり、全 15 回中、9 回で学内外からゲストを呼び、学習者に自由に質問させる。質問することは強制せず、あくまでも自由意思で挙手した者を指名する形式にしている。ゲストは、日本語母語話者と非母語話者（1 年度目 4 名・2 年度目 5 名）をバランスよく人選した。実際の会話指導は、受講生には自由に質問・コメントさせつつも、ゲストとの間に 2 往復以上のやり取りが起こるようにサポートする。具体的には、会話が滞ったり、適切な表現が出て来なかったりした場合は、担当講師である本稿の筆者が積極的に介入してスキヤフオールディングし、適切な語彙・表現が出て来て会話が進むまで支援する。ここが、ゲストと受講生の自由なやり取りを奨励して、活動終了後にフィードバックを行う、一般的なゲスト・セッションと異なるところである。最後に、受講生全員が一人ずつ他の受講生とは異なる感謝のことばをゲストに対して述べ、活動を終了する。このため、積極的にゲストに質問・コメントしなかった受講生も、敬語的な表現をする機会が与えられるのである。

このようなゲスト・セッションを 3 回行った後に 1 回の「振り返り」の時間を置き、狭義敬語の整理の復習と小クイズを実施する。残り 3 回は、初回の講義概説、最終回の期末レポート作成と年末回の年賀状作成である。

2.3 狭義敬語とスピーチスタイル

本節では、本授業実践の受講生に提示した狭義敬語の分類とそのそれぞれのスピーチスタイルとの関係を解説する。

まず、狭義敬語であるが、初級の教科書一般に見られる「尊敬語」・「謙譲語」・「丁寧語」の 3 分類ではなく、それに「丁寧語」・「美化語」を加えた 5 分類で指導した⁵。「丁寧語」は、教科書などで「謙譲語」に加えられているオル・マイル・イタス・申ス・存ジル・ゴザルを取り出してこの分類に入れる。「美化語」は、接頭辞のオ～とゴ～のみであると説明した後、「お仕事」や「ご所属」のように「尊敬語」に、また、「お返事」や「ご説明」のように「謙譲語」に転用されるメカニズムを解説する。

次に、これら狭義敬語とスピーチスタイルのレベル別分類の関係を説明する。本稿の筆者は、スピーチスタイルを丁寧さのレベルで「+2 レベル」・「+1 レベル」・「0 レベル」・「-1 レベル」の4分類に分けて指導している。「0 レベル」は、談話内の文の文末がすべて「丁寧語」の～デス・～マスで終わっているが、「尊敬語」・「謙譲語」・「丁寧語」が登場しない文体で、これが日本語の通常会話の中で最も基本的なスピーチレベルであり、いわばデフォルトレベルである⁶。「+1 レベル」は、この「0 レベル」に「尊敬語」・「謙譲語」が加わって、丁寧さが一段上がったレベルである。「+2 レベル」は、「+1 レベル」に「丁寧語」と「丁寧丁寧語」⁷が加わったレベルで、丁寧度が最高レベルのものである。「丁寧語」は、その所属語彙が一つでも加わったとたんに会話のレベルが一段階上がるため、スピーチスタイルのレベル設定のために極めて重要なものであるが、日本語の初級教科書ではこれが「謙譲語」と混同されているために、学習者が「+2 レベル」を特徴づける「丁寧語」の敬語的な役割を認識できないという深刻な問題を生み出している。なお、「丁寧語」の～デス・～マスが一切使用されないレベルは、いわゆる「タメ口」であり、これを「-1 レベル」と呼ぶ。日本語のスピーチスタイルは、このように、「+2 レベル」から「-1 レベル」までの4つカテゴリーが存在し、狭義敬語の「尊敬語」・「謙譲語」・「丁寧語」・「丁寧語」・「美化語」は、それぞれそのレベル設定にふさわしい丁寧さを特徴づける要素になっている⁸。

ちなみに、「美化語」は、どういう機能で使われるかによって、上記すべてのレベルで使われ得る。たとえば、「ご紹介いたします」という「謙譲語+丁寧語」の形式に入っていれば「+2 レベル」で、「あたし、明日お仕事、お休みなな」のような表現に入っていれば「-1 レベル」で、それぞれ使われていることになる。また、「+2 レベル」と「-1 レベル」には、そのレベルにふさわしい文体語彙が豊富に存在する。「+2 レベル」では、「わたしたち」に対する「わたくしども」、「今日」に対する「本日」、「(会場・車)で」に対する「(会場・お車)にて」などのようなことばである。「+2 レベル」に登場する、このような語彙を、本稿の筆者は「丁寧文体語彙」と呼んでいる。「-1 レベル」にも、「ぞんざい文体語彙」と呼べる語彙群が存在するが、紙幅の関係で、本稿では紹介を割愛する⁹。

2.4 敬語使用の指導例

「2.2 受講生とシラバス」で、ゲスト・セッションの敬語使用指導に際しては、「担当講師である本稿の筆者が積極的に介入してスキャフォールディングし、適切な語彙・表現が出て来て会話が進むまで支援する」と述べた。その実際の一部を再現して以下に示す。「La/Lb…」は「Learner a/Learner b…」で受講生を表し、「T」は「Teacher」で担当講師である本稿の筆者を表す。

例1)

La: 私(わたし)は、ピアンカ・ベレーアと申します。よろしくお願ひいたします。

T: あ、ちょっと、「わたし」じゃなくて、もっと丁寧に。

La: ?? (どう言えばよいか分からない様子)

T: 「わXXし」(と板書する) この「X」に何が入る?

La: あっ、「わたくし」ですか。

T: はい、そうです。じゃ、もう一度。

例2)

Lb: 失礼ですが、住んでいらっしゃる場所はどちらでしょうか。

T: あ、えーと、それで正しいですけど、「住んでいらっしゃる場所」をもっと短い名詞にしてください。

Lb: ご住所はどちらでしょうか。

T: あー、それじゃ警官の質問だなあ。だれか分かる人？(クラスに聞くが返答無し) ふうん、じゃこれを読んでください。(ホワイトボードに貼ってある五十音表の文字をポインターで指す)

Lb: お・す・ま・い。

T: はい、このことばはあとで説明しますから、とりあえず同じ質問をもう一度、どうぞ。

例3)

Lc: お勤めの会社の名前は、漢字でどうお書きになりますか。

T: あー、「アナタハドウ書クカ」という事実を知りたいんじゃないで、「書イテホシイ」と言いたいんですよ？(Lc、うなずく)だったら「依頼」にしてください。

Lc: えーと、お勤めの会社の名前を、漢字で書いていただけませんか。

T: はい、それで完璧ですけど、それを「許可求め」の形にしてください。

Lc: ...書いていただいてもよろしいでしょうか？(これでいいのか不安顔)

T: はい。それがいちばん丁寧です。じゃ、もう一度。

例4)

Ld: これまでタイに行かれたことがあるでしょうか。

T: それだと、夕形にする動詞の尊敬語形を考えなきゃいけないで、めんどろでしょ？その動詞は尊敬語にしないで「ある」をこの形にしてください。(ホワイトボードに貼ってある五十音表の文字をポインターで指す)

Ld: お・あ・り。行ったことがおありでしょうか。

T: はい、このほうが動詞を尊敬語にしないから、簡単に作れるでしょ？
じゃ、もう一度聞いてください。

以上のように、本校の筆者が執拗なほどスキャフォールディングをしているが、中級まで進んでいるはずの受講生が提示された語句や表現を学習したことがないという事実が確認される。これは、2022年度でも2023年度でも同様であった。日本語教育の敬語指導不全の現状が推察される場面である。

このような指導を行った結果、受講生は次第に敬語使用に慣れていき、講座後半に入るところには、以下のような発話ができるようになってきている。敬語の種類として何が使えるようになっていくかを、「尊敬語」には下線を、「謙譲語」には波線を、「丁寧語」には二重下線を、それぞれ施し、「丁寧文体語彙」は文字を斜体にして示しておく。「丁寧語」は除いてあるが、「丁寧語」に付いている「丁寧語」は、その「丁寧語」まで含めて、1つの「丁寧語」と考えて扱う。「美化語」は、「尊敬語」か「謙譲語」として処理した。

☆私(わたくし)は、ピアンカ・ベレーアと申します。よろしくお願いいたします。

☆すみませんが、お名前を教えてくださいませんか／いただけませんか。

☆すみませんが、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか。

☆失礼ですが、お住まいはどちらでしょうか。

- ☆個人的な興味ですみませんが、お好きな色を伺ってもよろしいですか。
- ☆最近の大きな自然災害について、どのようにお考えでしょうか。
- ☆お勤めの会社の名前を、漢字で書いていただいてもよろしいでしょうか。
- ☆今おっしゃった、「おはぎ」ってどんな食べ物なのか、教えていただけませんか。
- ☆今、務めておいでの会社では、どんなお仕事をしておいでなんですか。
- ☆プライベートなことですが、ご退職後は、どんな計画をお持ちですか。
- ☆これまでタイに行ったことがおありでしょうか。
- ☆今までいらした海外の町で、いちばんお気に入りの町はどこでしょうか。
- ☆ベトナムへの旅行でいちばんよかったところをお聞きしたいのですが。
- ☆ちょうどミュンヘンの観光地図を持っていますので、よろしければ差し上げます。
- ☆今年パリに留学なさるんでしたら、おいしいマカロンの店をご紹介しましょうか。

これらの発話例を見れば、基本的な敬語がきちんと使えていることが分かる。また、そればかりでなく、「個人的な興味ですみませんが…」や「プライベートなことですが…」のようなメタ言語表現が使えるようになっており¹⁰、敬語使用の、話し相手に配慮を示すというもっとも基本的な機能が表現として身に付いていることもうかがえる。また、最後の2例のように、ゲストの発話内容を踏まえて「申し出」を行うというような積極的な働きかけも見られ、この敬語会話練習は単なる訓練ではなく、ゲストとの個人的な交流を目指すものであるという意識が生まれている。敬語の練習と言えば、単にネイティブスピーカーあるいはニアネイティブな日本語話者に対して適切な敬語を使っているかどうかということに関心が向きやすいが、実際はこのように相手に興味を示し、個人的にかかわりを持つとする姿勢を育むことが重要なことであると認識すべきであろう。

3. まとめと今後の課題

以上、現行の日本語教育において、狭義敬語使用の指導、および狭義敬語とスピーチスタイルの関係の指導がおろそかにされている点に関して、その解消を図るべく、ゲスト・セッション活動を通じて、ゲストに対して質問したり、コメントしたり、ある場合は「申し出」のような積極的な働きかけをしたりするやり取りを適切な敬語を使用して行わせる会話練習の指導実践を報告した。そもそも、上級学習者に対してすら十全たる待遇表現教育のシラバスが構築されていないという問題は、すでに小川（2003）に鋭い指摘がある。そこに挙げられた問題は多岐にわたるが、そもそも、上級課程でさえ、日本語の会話文体には「丁寧体」の中に丁寧さのレベルが3種類あり、それが狭義敬語のカテゴリーと相関する関係にあることの認識が欠如していることが致命的である。このような会話文体の丁寧さに関する適切な提示とその中における敬語使用の指導の現状は、初級課程を含めてただちに改めなければならないと考える¹¹。最近では、坂本他編著（2023）やアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（2024）のような中級学習者を対象としたきわめて優れた待遇表現教材が出ているが、これらでも紹介されている敬語の数は十分とは言えない¹²。現場の教師個人が意識的に指導するしかないというのが今後の課題と言える。それでも、本稿の筆者が行った実践をあちこちで紹介したところ、国内外の大学でビジネス日本語講座を持つ複数の機関が強い興味を示し、自分たちの実践に取り入れていきたいとアドバイスを求めてきている。今後は、これらの分野の実践者の活動成果を集約

しながら、本稿で紹介した指導法の有効性を確認していきたいと考えるものである。

<注>

1. この要素の詳細は、川口（2025: 6-7）参照。
2. 本稿の筆者は、丁寧度による会話文体のレベルを、「+2」・「+1」・「0」・「-1」の4段階に分けている。ここで言う丁寧度内部の3種類のレベルとは、この「+2」・「+1」・「0」を指す。詳細は、川口（2019: 139-142）参照。本稿でも、「2.3 狭義敬語とスピーチスタイル」において簡潔に記述する。
3. この実践で取り上げた機能的会話文の種類は、蒲谷他（2004）の記述に基づき特定の表現意図によって分類されたものである。その種類と各種類の典型的な表現例は、同文献 p.121 の一覧表を参照されたい。本実践で取り上げた表現意図は、同一覧表中の9種類から「確認」と「宣言」を除き、会話文向きの「提供」と「提案」を加えたものである。
4. 「日本語ロールプレイ作文」の実践報告は、2024年8月22日～24日にブダペスト（Budapest, Hungary）で行われた「AJE 日本語教育シンポジウム」の第27回研究発表会にて行った。いずれ発表論集が刊行されるため、そちらに論文化して投稿した。本稿<注1>・<注8>・<注9>の「川口（2025）」は、その刊行予定文献であるため、ページ数は元原稿のものである。
5. この狭義敬語の分類法とそれぞれの分類における所属語彙については、蒲谷他（2004: 90-113）・川口（2016: 128-135）を参照されたい。
6. 本稿「1」で述べたように、初級教科書の多くは、「する」・「しなかった」・「したくない」・「しておいた」のような形態論的な概念である「普通形」で終わる文のスタイルを「普通体」と呼んでいるが、それは、いわゆる「タメ口」の「ぞんざい体」であって、およそ一般的な成人の日本語母語話者が広く社会生活に使っているものではない。その意味では、「0レベル」のスピーチスタイルこそが会話の「普通体」なのである。
7. 「丁重丁寧語」とは、「丁寧語」のうち～デゴザマイマスと～デアリマスをこう呼ぶ。この二つは、「丁寧語」ながら「+2レベル」の構成要素となり得る。
8. ちなみに、「0レベル」と「-1レベル」の間には、中級教科書にさえ言及されていない複数のスピーチスタイルが存在する。詳細は、川口（2025: 6-8）を参照されたい。
9. 詳細は、川口（2025: 7）を参照されたい。
10. 質問やコメントの内容によっては、このようなメタ言語表現で発話を始めることが相手への配慮につながることを、それがふさわしいゲストとの会話文脈を見定め、何回か具体例を示して指導した。
11. 日本語教育の中級・上級段階における待遇表現教育については、川口（2022: 588-597）に7名の待遇表現教育の研究者による実践研究論文や創作教材の詳細な紹介がある。併せてご参照いただきたい。
12. たとえば、どちらの教材にも丁重文体語彙の系統的な紹介が無い。また、尊敬語の「お【動詞連用形】だ」（お出かけだ・お休みだ…など）・「ご【動詞性漢語】だ」（ご到着だ・ご参加だ…など）形式の提示が無い。そのため、本稿で紹介した「(行ったことが) おありでしょうか」のような表現が学べない。

引用文献

- アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（2024）『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション－気持ちが伝わる中級からの日本語待遇表現』 The Japan Times.
- 小川誉子美（2003）「待遇表現指導に関する試論－上級者用シラバスの構築に向けて－」『広島大学留学生センター紀要』13, 47-54 広島大学留学生センター.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵（2004）『敬語表現』第8刷大修館書店.
- 川口義一（2016）『もう教科書は怖くない!! 日本語教師のための初級文法・句型完全「文脈化」・「個人化」アイデアブック』第1巻 ココ出版.
- 川口義一（2022）「日本語教育における敬語」（荻野綱男編『敬語の事典』〈朝倉書店刊〉第4章 579-599 所載）.
- 川口義一（2025）「日本語における複言語教育－スピーチスタイル意識化のための教室活動－」『第27回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム論文集』（近刊）所載
- 坂本恵・高木美嘉・徳間晴美編著, 宇都宮陽子・福島恵美子・丸山具子・山本直美・吉川香緒子著（2023）『聞いて慣れよう日本語の敬語 場面で学ぶ日本語コミュニケーション 中級前半から』スリーエーネットワーク.